



Another Route of Trading Activities and Interaction between Wa and Han

白石太一郎

はじめに

- ①全羅南道の前方後円墳
- ②玄界灘沿岸地域と有明海沿岸地域
- ③彩色装飾古墳の成立の背景
- ④有明海沿岸勢力の朝鮮半島交渉

むすび

〔本文要目〕

朝鮮半島の西南部に位置する全羅南道の西よりの地域では、5世紀後半から6世紀前半のごく限られた時期に盛んに前方後円墳が造営される。その中には円筒埴輪や倭系の横穴式石室をもつものが存在することからも、これが日本列島の前方後円墳の影響により出現したものであることは疑いない。それがそれまで倭と密接な関係を持っていた加耶の地域にはまったくみられないことは、この時期になって全羅南道の勢力が倭国ときわめて密接な関係をもつようになったことを示している。これはまた日本列島の須恵器の祖型と考えられる陶質土器が、初期の加耶のものから5世紀前半を境に全羅南道地域のものに変化することとも対応する。これらのことは、5世紀前半を境に倭・韓の交渉・交易の韓側の中心的窓口が加耶から全羅南道地域に変化したことを示唆している。

こうした韓側の窓口の変化に対応するかのように、倭国側でも対韓交渉の中心的扱い手が、それまでの玄界灘沿岸地域から有明海沿岸地域に変化したらしい。5世紀前半以降、玄界灘沿岸ではそれまでみられた比較的大型の前方後円墳がみられなくなり、替わって筑後や肥前の有明海沿岸に大型の前方後円墳が営まれるようになる。一方、全羅南道地域の前方後円墳にみられる倭系横穴式石室は、北部九州でも有明海沿岸の肥前東南部や筑後地域の横穴式石室の影響により成立したものであることは疑いない。また複数の彩色を施した本格的な装飾古墳が成立したのが有明海沿岸の肥後の地であることも重要である。その成立に、朝鮮半島の古墳壁画からの何らか刺激を受けたことが考えられるからである。熊本県菊水町の江田船山古墳の豪華な金銅製裝身具類などの副葬品もまた、5世紀後半から6世紀前半のこの地域の人びとの活発な対朝鮮半島交渉を示すものである。

日本書紀の敏達紀にみられる百濟の高官日羅を「火革北國造刑部叡部阿利斯登の子」とする記載もまた、有明海南部の葦北の首長の対百濟交渉を示すものである。さらにその交渉を指示したのが大伴金村であったことも、こうした有明海沿岸各地の首長層の外交活動が倭国の外交活動に他ならなかったことを示している。さらに、玄界灘沿岸～加耶ルートの海上交通の安全を祈る沖ノ島の祭祀に有明海沿岸の水沼君が関わるようになるのも、対韓交渉の扱い手が玄界灘沿岸から有明海沿岸にかわった歴史的事実を反映するものであろう。こうした検討結果からも、5世紀前半墳を境として、倭・韓の交渉・交易活動の中心的扱い手が、朝鮮半島側では加耶から全羅南道地域の勢力に、倭国側では玄界灘沿岸の勢力から有明海沿岸の勢力へと変化したことは疑いなかろう。